

さあ、私が今あなたにしてほしいことを記そう。礼拝に集まった時には、各々、全ての人にとって役立つものを準備しなさい。つまり、詩編を歌うこと、教えを説くこと、物語を宣べ伝えること、祈りを導くこと、洞察力を養うことを、それぞれ備えて集まることにしなさい。

——コリントの信徒への手紙（一） 14章26節

マルコが伝えた「良い知らせ」

——マルコ伝福音書 訳述——

川上直哉

過ぎ越し祭り 1

そうしてついに、首都エルサレムの近くまで、イエス様とその一行（ずいぶん大人数になっていました）は、やってきました。そこにはオリーブ山があって、ベトファゲという村と、ベタニアという村とがありました。目指しているエルサレムまではあと3キロ程度です。イエス様は村へとお弟子さんたちを送って言いました。「あの村へ行って、入口すぐのところで子ロバが見つないであるのを見つけたら、それを連れてきてください。誰もまだ乗ったことのない、小さな子ロバですよ。その時、誰かが『なぜそんなことをするのか』と聞くでしょう。そういう時はこう答えるようになさい——『うちのご主人が御入用です。すぐ戻しますから』と。

お弟子さんたちは出かけて行きました。そして町に入ると、道路に「子ロバ」が見えました。子ロバは戸口につないでありました。お弟子さんたちはその綱を解きます。そうすると、そこに立っていた人がお弟子さんたちに「その子ロバを解いて、何をするのですか」言いました。お弟子さんたちは、イエス様に言われたとおり、答えました。そうすると、その人たちはお弟子さんたちのしたいようにさせてくれました。つまり、イエス様の言葉が「合言葉」になっていたのです。イエス様はもう、着々と、これから起こることの手配を済ませておられたのです。



お弟子さんたちはイエス様の所に子ロバを連れて戻りました。そして、自分たちの上着を脱いで子ロバの上にかけますと、イエス様はその子ロバの上に乗られました。まだ誰も乗せたことのない、小さな子ロバです。おとなのロバでも 1.5 メートルほどしか高さがありません。子ロバの上に乗ったイエス様の頭は、周りにいた有象無象の人々の中に埋もれて見えなくなってしまう。イエス様の周りにいたお弟子さんたちは、イエス様の乗った子ロバの前に自分たちの服を並べて道にしました。それから、野の葦^{よし}を切って来て、イエス様の前からも後ろからもこう叫びました。「ホサナ！聖書の神・主の聖名^{みな}において来る方に祝福を！私たちの父ダビデの国がもうすぐ来るぞ！その国に、祝福を！天のいと高きところに！ホサナ！」――季節は春、この地域では農作業の始まりの時でした。でも、こ



この大騒ぎは、まるで「秋」のお祭りの様でした。というのは、この地域でも、秋になりますと「収穫感謝」のお祭りをするのですが、特に首都エルサレム辺りではこのころ、定められた草や木を持ってみんなで

「ホサナ＝私たちを助けてください」と叫

ぶ習わしでした。イエス様の旅は、いよいよ目的地に近づきつつある。ついてきた人々は興奮し、まるで収穫感謝のお祭りのように、叫んだ。その興奮は、「新しい指導者が来た。新しい国になる。天国が到来する！」という興奮です。これまでずっと、踏みつけにされ、無視され、黙らされてきた人々が、興奮しています。「いよいよ、助けて下さるのですね！」と、大騒ぎをしているのです。



でも、実際はどうなのでしょう。興奮する群衆の中に、イエス様の姿は見えません。イエス様のいる場所は、ぽっかり穴が開いたようになっています。たくさんの人々が手に葦をもってそれを振り上げている、その林のようになった真ん中に、穴が開いたようになって、何かが進んでゆく。子ロバに乗ったイエス様です。周りの人の肩より下に、イエス様の頭が来ます。「偉大なる指導者」は、見えない。そこにいるけれど、誰よりも小さくなっている。そして、その周りにいる人々は、その「子ロバに乗った」イエス様の前に、自分の上着を敷いて行く。不思議な行進になりました。その行進は、3キロも続いたのです。延々、次々と、イエス様の周りの人々が「一番小さくなった人」の前に上着を敷いて行く。この不思議な行進こそ、イエス様が準備して狙ったもの、そのものでした。それはイエス様のお考えの通り、そこにしっかり、行われたのでした。



そうして遂に、イエス様とその一行は首都エルサレムに到着しました。イエス様は神殿を見に行き、ぐるっと全体を見てから、もう夕方になっていたのも、また3キロの道に戻ってベタニアに帰りました。

次の日、ベタニア村を出て行かれたイエス様は、お腹がすいていました。ふと目をやると、遠くにイチジクの木がありました。何か食べられないかと、イエス様はそのイチジクの木に近づいて行かれました。季節は春です。というのも、イエス様は春のお祭りである「過ぎ越しの祭り」の時期を狙って、首都エルサレムへの大行進を仕掛けたのでした。イチジクは夏から秋にかけて実をつけるものです。春の頃と言えば、盛んに葉ばかり繁る、イチジクの木です。もちろん、その木の中に、何も食べ物は見つかりません。

イエス様がエルサレム入りの時期として選んだ春の祭り「過ぎ越しの祭り」とは、いったい何でしょうか。それは「奴隷は解放される」ということを記念し喜ぶお祭りでした。みんなでモーセの「出エジプト」物語を追体験することで、「だれも、使い捨てにはされない」ということを確認し合う大イベントです。つまり「人間を家畜にしてはいけない」と戒め合う大きな催事が、首都エルサレムをあげて、行われている。そこに向かう無数の人々。イエス様と一緒に来たのは、ずっと「使い捨て」にされてきた人々です。世の中はずっと、その人々を「生かさず・殺さず」においておき、まるで「家畜」を飼いならすようにしてきた。イエス様はその人々を目覚めさせた。立ち上がらせた。そしてみんなで、「過ぎ越しの祭り」をめざして、首都エルサレムに入って行った。イエス様はロバの子に乗って。イエス様は数千人を超える群集の中に埋もれる小さな一人となって、みんなと一緒に、「過ぎ越しの祭り」に入って行った。そして、そのお祭りの様子を見てから、首都エルサレムを出て3キロ先の友だちの家で一晩を過ごした。そしてまた朝になり、エルサレムをめざして出かけた。途中、お腹がすいて、イチジクの木に近づいた。イチジクの木は立派な葉を盛んに繁らせながら、でも、そこには何も、食べる物がなかった。――ふと、イエス様の胸に、昨日のエルサレムの様子が思い出されてきました。顔はみるみる赤く紅潮し、目には怒りの炎が見えるようです。イエス様は「不実^{ふじつ}」な木に向かって言いました。「この先ずっと、いつまでも、お前から実を取り食べる者はいないことだろう。」お弟子さんたちはイエス様のこの様子を見ながら、この言葉をじっと聞いていました。



そしてまた、一行は首都エルサレムに入りました。当時の都市の一般的な形の通り、エルサレムも街の周囲をぐるりと高い壁で囲っていました。その門を通ると、すぐ、「過ぎ越しの祭り」の賑わいがあります。その賑わいは、町を中心部である神殿に向かって盛り上がっていました。神殿もまた、さらに立派な高い壁に囲まれた敷地の中にありました。その門をくぐると、中はとても賑やかでした。多くの人が壁の中でひしめき合うようでした。世界中から人々が集まり、神殿の中の「最初のひろば」で盛んに何か、やっています。目を上げますと、この広場の中にはまた、高い壁があります。その壁の中へと、また人が入っていきます。この「最初のひろば」は、まるで市場そのものでした。いろいろな人がいました。あちこちに動物もいました。そして、たくさんの警備兵もいました。

入り口

巡礼者たちは幾つもの階段を通り抜けて神殿の丘に近づいた。南にあるフルダ門 (①) は王室の廊の下にある地下宮殿から神殿の高台 (②) に続いていた。コボニアの門 (③) はチロベオンの谷に架かる橋に続いており、そのまま町に出ることができた。シュジャン門 (④) はオリブ山に向かっていった。北にあるタディ門 (⑤) は公の門としては使われていなかった。また、南東側と南西側には2つの門があり、その下の通りに続く階段に行くことができた。

変革された神殿 (新約聖書時代のヘロデ神殿)

ヘロデはゼルバベルの建てた神殿をただ単に増幅しただけでなく、完全に変革した。彼は、2階部分を加えることで高さを100キュビト増やし、入り口ホールに新しい真鍮部分を付け加え、建物をT字形にした。表面は白い大理石で覆い、金で装飾した。建物は前20年から19年ごろ始まり、前10年に神殿が奉獻された。しかし、外庭の工事はその後も数十年続いた。

た。ヨセフスの記録では、紀元64年頃に完成が宣言された『ユダヤ古代誌』20:219。残念なことに、その3年後戦争が起これ、この美しい大建築物は紀元70年に完全に破壊された。

ゼルバベルの建てた神殿

70年バビロン神殿が焼失後、聖王ゼルバベルが、バビロン王ダレイヌス1世の援助を得て、荒廃したソロモン神殿を再建した。第二神殿は、ヘロデ王は更に大規模な拡張をした。

神殿を見下ろすアントニヤ城塞は、エルサレム駐在のローマ軍の基地だった。ここには500人から600人の、名ばかりの軍が居住しており、現代の軍事基地のようになっている。生活に必要な施設が何でもそろっている小さな町になっていた。ヨセフスによると、「すべての必要の備った町であり、その堂々たる姿は、宮殿のようであった。城塞がそこにあるのは偶然ではなかった。祭りのおき、神殿はトラブルが発生しやすい場所だったからだ。

④のシュジャン門

バビロンの門、シュジャン (スチ) の名残が不審だ。門は、バビロンの門の下に似て、時代が違っても、

イスラエルの国は、いかにえの動物を養う場所として使われていた可能性がある。

コダヤ人によると「全然使われなかった」(ミシュナー・ミドット1:3) タディ門という北の門があった。人の出入り口としては使われなかったが、この場所だけ、動物が必要でなかったため、動物を引き入れるための門であった可能性はある。

婦人の庭には6,000人の乳母が入ることができた。ここには男女共に入ることができたが、女性はここには行けなかった。

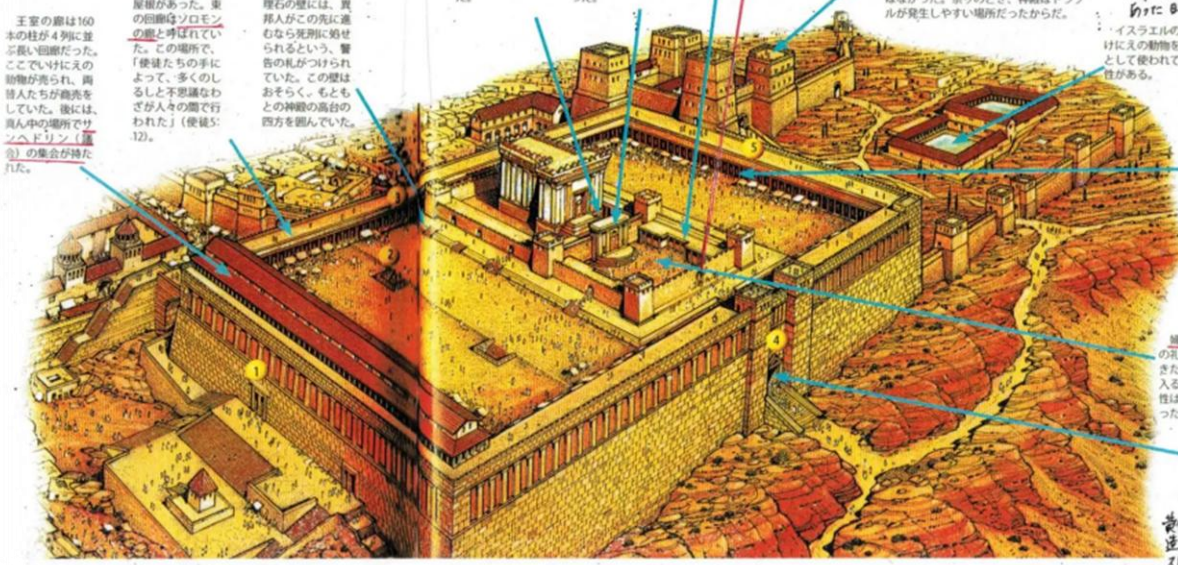
神殿の丘の東の入り口、シュジャン門は、ケデロンの谷に続いていた。ここに、現在の黄金門がある。黄金門は6世紀に建てられ、16世紀のイスラエル王に開かれた。

神殿の丘の南の回廊には杉材の屋根があった。東の回廊はソロモンの庭と呼ばれていた。この場所で、「使徒たちの手によって、多くのしるしと不思議なわざが人々の間で行われた」(使徒5:12)。

異邦人はソレグまでしか行けなかった。この低い大理石の壁には、異邦人がこの先に進むなら死罪に処せられるという、警告の札がつけられていた。この壁はおそらく、もともと神殿の高台の西方を囲んでいた。

イスラエルの民の庭へは、神殿の入り口は二カ所だった。これは、二カ所という人が参拝したコリントの廟をつくられた。立派な門だった。女性はこの先に入ることは許されなかった。

美しい門



そこでは、人々が盛んに売り買いをしていました。まず、両替商がたくさん出店を出していました。この当時、ローマ帝国は地中海全体を支配しており、広大な地域で商売が可能になっていましたから、ローマ政府が発行したり認証したりしたコインが普通に使われていました。でも、そのコインはこの神殿の中では通用しませんでした。考えてみれば、それは当然かもしれません。青銅や銀で造られたコインは、そのもともとの青銅や銀よりも価値があるとされました。そしてそれはコインに刻まれた「神々の像」や「皇帝の顔」の力によるものでした。それは不思議な力、まさに「神さまの力」です。そして、ここは「ヤハウェ（あらしむるもの）」という名前の「聖書の神様」の神殿。この「聖書の神様」は、「形をもった神さま」の力を否定しています。ですから、そのコインは「インチキ」ということになります。ですから、神殿の中ではまず、「インチキ」ではないコインと両替しなければならない。だから、両替商がたくさん並ぶ。中に入った人はまず、両替商に行って、手数料を払って、両替をします。

それから、両替をした人々は、牛や鳩を買いに行きます。お金持ちは牛を、普通の人は鳩を買います。そしてそれを連れて、神殿の中にある壁の中に入り、神様にお捧げをする、その時に、聞いたこともない美しい音楽や歌、そして素晴らしく綺麗な儀式を、どこでも嗅ぐことのできな素敵な香りに包まれて、想像もできないほど素晴らしい建物の中で、触れて見て聞いて感動する——という特別の体験ができるのです。ただ、そこでお捧げする動物は、神様にお捧げするのですから、傷があってははいけません。でも、小さな傷は、生き物なのですから、当然、いくつもあります。だから、「この程度ならよい」という“認証”を、役所から出してもらう。その“認証”をつけた牛や鳩が、この「最初のひろば」で販売されている。それを買うために、人々は両替をする。

とても広い広場です。そこではたくさんの人が集まる。そこに集まった人々を目当てに、食べ物屋さんも、雑貨屋さんも、市を連ねる。もちろん、その広場も無限に広いわけではありません。だから、場所取りが大変です。ですから、お役所がその場所も指定し、場所代を徴収していました。



両替商の手数料、動物の“認証”、そして市場の場所代。それらを管轄しているお役所が、実は、神殿そのものでした。こうして神殿は巨大な利益を上げて運営されていました。そして、その利益の源は、「壁」でした。「最初の広場」は、誰でも入れました。でも、その中にある壁の中には、「イスラエル人」しか入れませんでした。そしてその中にまた壁がありました。その中には「健康な男性」しか入れなかった。まず、人を囲い込み、そしてその中で、人をえり分けて、管理する。その管理の枠の中で、人々が喜んだり悲しんだり喧嘩したり楽しんだりしている。そうさせることで、莫大な利益を吸い上げる。この神殿は、人々を飼い慣らす巨大な装置になっていました。それでも、そこに人々は集まってきました。魅力があったのです。その魅力は、その神殿の中心にありました。その神殿の中心には、巨大な壁に囲まれた小さな部屋がありました。その部屋の中には、この神殿のご神体があった。そのご神体は、「十戒」でした。

「十戒」とは何でしょうか。それは「奴隷のいない国」を作り出すための憲法でした。「十戒」は一つの設計図です。その通りすれば、奴隷のいない国ができる。だれも家畜にされない国。誰も使い捨てにされない国。多くの人が憧れる国を実現するのが「十戒」です。それは、魅力的なものです。そして、その魅力をみんなで体感するイベントが「過ぎ越しの祭り」でした。

でも、そのお祭りは、巨大な壁によって作り替えられていました。その巨大さが、人々を圧倒するので、みんな、騙されてしまうのです。そこに集まる人の多さに、感覚が麻痺してしまう。そして、気が付くと「家畜」のように飼いならされている。「誰も家畜になってはいけない」ということを実現する「十戒」の魅力を使い、その夢の実現を体感する「過ぎ越しの祭り」を利用して、人々が使い捨てられている。――それが、イエス様の目に映った神殿の様子でした。

昨日、それを確認したイエス様は、今日、すぐに行動を起こします。遠く全国から集まり、イエス様と一緒にやってきた無数の人々と共に、イエス様は神殿の「最初の広場」に入るとすぐ、片っ端から、売り買いをしている人に「出て行け！」と怒鳴りつけ、両替商の出店をひっくり返し、鳩を売る屋台（つまり、貧しい人々を相手に金を巻き上げる末端）を壊し始めました。そして、何かを持っている人は誰も行き来できないようにしました。数千人の人が、イエス様と一緒に、そうしました。このことを通して、イエス様は一つのことを教えようとしていました。実際、イエス様はこう言ったのです。

こう書いてあるではないか。

「私の家は すべての民の 祈りの家と呼ばれる」

事もあるうに そのはずが 泥棒の家とってしまうとは！

ここでイエス様が引用しているのは、『旧約聖書』にある「イザヤ書56章」の有名な言葉でした。そこでは、預言者イザヤが「『外人・よそ者』とされる人々」に向かって「神様は自分たちを差別する、と言っではいけない」と言い、「『自分には何も残すものがない』とがっかりする人」に向かって「自分は枯れ木だ、と言っではいけない」と語りかけています。「ただ、正義を行い、慈しみを行え。奴隷が解放される日・救いの日は近いのだから！」と呼びかけ、「外人・よそ者、無能と馬鹿にされる人々が、安心していられる場所がある。それが私の神殿だ！」と語る、それが「イザヤ書56章」でした。

騒ぎは一斉に始まり、そして治まりました。数千人の人々が、聖書の中心である「十戒」を奉じる神殿で、聖書の言葉に従って革命を起こしたのです。だれも、それを止めることができません。神殿は、今、まさに「イザヤ書56章」にある通りの場所になりました。もう、ここではだれも、差別されない。どこで生まれた人でも、どんな言葉を使う人でも、男でも女でも、障がいがあってもなくても、差別されない。馬鹿にされない。無視されない。みんな、「人ひとり分の権威」をもって大切にされる。十戒が目指した夢のような場所が、とつぜん、ここに現われたのでした。後の人はこれを「宮清め」と呼びました。そしてこれが、イエス様の十字架の決定的な原因になったのでした。

神殿という役所の最高責任者たちは学者たちと一緒に、この出来事に際して、「どうやってイエスを滅ぼせばよいか」と話し合い検討を始めました。とにかく、イエス様のことが恐ろしく思われました。無数の人々が、イエス様の言うことに感動し、目の前に広がる新しい世界に夢中になっていました。

夕方になったので、イエス様は首都エルサレムの外に出ました。また、ベタニア村に戻って行きます。「首都を占領した領主」ということではないと、これもはっきりみんなに見えるように、イエス様は友達の家に戻って行きます。この日は、こうして終わりました。